
「泡」/サスサク

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「泡」/サスサク

【Nコード】

N6643A

【作者名】

深海

【あらすじ】

嵐にあった少年を助けた少女の話です。

s t a g e 1

ちやぷん…ちやぷん…

波に身を任せただ流れて行く。
私を閉じ込める広い海に溶けこんで。

ちやぷん…

あなたに逢うまではそれでいいと思ってた。
それが私の生き方だって。

あなたに逢ってしまうまでは。

大声を上げなければすぐ隣にいる人にでさえ、聞こえない様な激しい風と雨。大きくうねる波が更に波を飲み込み、時折巨大な壁へと変貌する。

真っ黒な海にポツンと浮かぶ一隻の小舟。波に揉まれ見え隠れしているその舟に近づく一人の少女。その舟に乗っていたのは黒髪の整った顔立ちの少年。

今にも転覆しそうなその舟が、とうとう引っくり返り少年を黒く荒れる海に放り出してしまった。

「いけない……！」

荒れ狂う波の中を少女は舞う様に進んで行き、波に飲まれた少年を捕まえた。少年は気を失っていて息もしていない。体は冷えきっている。

少女は出来る限りの速さで陸へと向かい泳いだ。

「頑張つて！」

陸へとたどり着き少年を砂浜へ寝かせると顔を近付け、一瞬躊躇うも唇を付け息を吹き込んだ。

「ゴフッ……！ゲホッ！ゲホッ！」

水を吐き出しうつすらと意識を取り戻した少年の目に飛込んできた

のは、真っ黒な空に映える桜色。

「…あ、んたは…」

「もう大丈夫よ」

微笑む少女の言葉を遠くで聞きながら、少年は再び意識を手放した。

「…ん…ここは…？」

目覚めた少年は眩しさに目を細めた。

昨日の嵐が嘘の様に晴れ渡った青空が広がっている。

「助かったのか…」

気だるさが残る体を起こし、今は穏やかに心地よい波の音を聞かせてくれる海を見る。

ちやぷん…

ふと聞こえてきた音に、岩陰の方を見ると人影が目に入った。

「あれは…!」

スーッと滑るように沖へと向かっていく桜色。

少年はそれが見えなくなるまでその場に立ち尽くしていた。

c o n t i n u e

s t a g e 2

ちやぷん…

あなたに逢ってしまった私の欲望は膨らむばかり。

あなたに触れたい。

声を聞きたい。

触れて欲しい。

でもそれは叶わぬ夢。

ちやぷん…ちやぷん…

だって私は…

「サスケく〜ん！」

ぼんやりと道を歩いていたらサスケは、名を呼ばれハッと我に返る。
今まで耳に届いていなかった風に揺られ葉を擦り合わせる音に、街
中を歩いていたはずがいつの間にこんな所まで歩いて来たのかと首
を傾げる。

「こんな所で逢うなんて偶然ね！運命かしらー！」

立ち止まり振り返ると綺麗な髪を風になびかせ、手を振りながら走
ってくるいのが目に入る。

その後ろにはぶつちよう面のシカマルと、いつも笑顔を絶やさない
チョウジが歩いて来ている。

「サスケ君、海で大変だったんだって？いくら任務だからって酷い
目に合ったわよねー。皆心配してたのよ？」

一気に巻くし立てるいのに、サスケは眉間に皺を寄せ煩わしそうな
表情を浮かべていのを見やり、返事もせずに歩いて行ってしまふ。

「あっ！ちよつとサスケくん？」

「最近ずっとあんな感じらしいぜ?」

追い付いてきたシカマルがサスケの背中を見つめ言う。

「クールなサスケ君はかっこいいけど、ちょっと冷たすぎじゃない?」

口を尖らせ言うのに、シカマルは苦笑いする。

「なんでも恋してるみてーだぜ?」

「ええー!?!?」

「最近サスケの様子がおかしいんだってばよ」

「ふーん…。で？」

公園のブランコに揺られていたナルトが急に真剣な表情で声をひそめて言うと、シカマルは酢昆布をかじりながら興味無さげに呟く。

「本当に変なんだってばよ！ずっと上の空で…任務でも俺以上に失敗してばっかなんだぜ？」

ナルトはブランコから飛び下りると、ブランコの周りにある鉄柵に腰かけているシカマルの隣に並んだ。

「お前以上に？そりゃあ問題だな…」

眉間に皺を寄せ考え込むシカマルを見て、ナルトもそれを真似し、うむむと唸る。

「それは恋でしょ」

「うわっ！カカシ先生！」

「なんすかいきなり…」

急に背後に現れたカカシに驚く二人。
カカシは顎に手をあて、何度も頷く。

「上の空なのも失敗するのも、好きなコ的事ばっかり考えてるからでしょ」

「えっ！？そうなの？」

目を輝かせ食い付くナルトに気を良くしたカカシは、腰を屈めて二人の肩に手を置いた。

「ま、大方この前の任務で嵐に合った時に助けてくれたってコだろ
うな。一目惚れってやつ？君たちも早く恋をして大人になりなさい
よね」

そう、カカシの言う通り、サスケは嵐の日に逢った桜色の少女に心奪われていた。

それを恋と呼ぶかどうかはサスケ自身わからなかったが、もう一度あの少女に逢いたい。そればかり考えていた。

今日は風が少しばかり強く、波も苛立っているかの様だ。
サスケのように。

「今日も…か…」

サスケはあの嵐の日から、毎日海に足を運んでいた。

あの少女の情報は一切無い。

ただ一つ、この海で助けられたと言う事のみ。

だが一度も少女に逢う事はなく、サスケの想いは募るばかり。

「ん…？あれは…」

一瞬、波間に見えた海には不似合いな桜色。

サスケはその桜色を目指して海に入って行く。

「待ってくれ！っ…！」

ザブザブとしぶきを立てていたサスケが急に見えなくなる。
深みにはまったのだろうか。

「っはぁ…！」

再び水面に顔を出したサスケの目にはただ広がる海が写るだけで、
桜色を見付ける事はできなかった。

海の中を舞う桜色。

少女は仰向けに水面に浮かぶと少年がいた砂浜に視線を向ける。

少女に逢いたいがために毎日海へ足を運ぶ少年と同じく、少女もまた、
少年に逢うべくこの近辺に止まっていた。

声をかけようと思えばいつでもできた。

だが少女はただ遠くから少年を見ているだけだった。

ちやぷん…

小さく水しぶきが上がる。

そのしぶきを上げたのは桜色の尾びれ。

少女の腰から下は人間のそれではなかった。

「私が…こんな姿じゃなかったら…」

少女は忌々しい物を見るように自らの下半身を睨みつける。

「私も人間になれたらな…」

そう呟き、叶うはずのない夢だと自らの言葉に寂しげな笑みを浮かべ、少女は再び水中に沈んだ。

もし私が人間だったら、あなたは私に触れてくれますか？

ちやぷん…

私が人間じゃないと知ったらあなたは…。

c
o
n
t
i
n
u
e

s t a g e 3

ちやぷん…

私は人魚。

人間でも魚でもない中途半端な存在。

この姿を綺麗だと言う人もいるけれど私は嫌い。
だってあなたに逢ってしまったから。

ちやぷん…

この水面に広がる波紋の様に私の心は…。

すっかり日も暮れ真っ暗な中、少女は岩場に腰を下ろし少年がいた砂浜を見つめる。

―待ってくれ！―

昼間少女を追って海の中に入って来た少年。
その時の必死な様子が頭の中に鮮明に蘇る。

「あなたは一体どうしたいの？」

少女は己の下半身を手でスツと撫でる。
しつとりと潤いのあるそれは水中を自由に泳ぎ回れても、立って歩く事は出来ない。

「私もあなたと同じ姿だったら…」

「その願い、叶えてあげましょうか」

気付くと、いつの間に近くに来ていたのか、前方の岩場に立つ影があった。

黒い髪を胸の辺りまで垂らし、妖しく微笑むその人物に、少女はえたいの知れない恐怖を覚えた。

「怖がらなくても大丈夫よ。私は大蛇丸。あなたの願いを叶える事

のできる唯一の人間」

地を這い自分に迫りくる様な相手の気迫に、とつさに海中へ逃げようとした少女だったが、大蛇丸と名乗る相手の言葉を聞きピタリと止まる。

「…私の…願いを？」

「そうよ…あなた、人間になりたいんでしょう？」

大蛇丸は己の足下を軽く蹴ると、少女の元へと飛び移り、少女の下半身をゆつくりと撫でた。

「可哀想な人魚…これじゃあ想い人と並んで歩く事も出来ない…ましてやこの姿が受け入れられるかどうかも…」

その言葉に少女の頭に浮かぶのは、少年の冷たい眼差し。こんな姿で少年の前に現れても嫌われるだけだろう。少女は一つ息を飲むと大蛇丸を見上げた。

「本当に人間にしてくれるの？」

真剣な眼差しで訴える少女は気付かなかった。
大蛇丸の獲物を見つけた飢えた獣の様な瞳に。

「ええ…ただし、一つ条件があるのよ。…なあに簡単な事よ」

「…人間になれるなら…どんな事でもするわ」

翌日、少女は砂浜にいた。

つい数時間前まで自分が閉じ込められていた広い海を見つめて。

洋服に身を包んだ少女の下半身は大蛇丸により、人間のそれと同じ様に二本の足があった。

そして手にしっかりと握られている短刀。

大蛇丸から渡された物で、それはとても重く少女の心に重くのしかかる。

ゆっくりと立ち上がった少女は慣れない下半身によるめく。

「あんた…！」

声がした方を振り返ると、そこには少年がいた。
酷く驚いた様子で少女の元へ走って来ると、少女をきつく抱き締めた。

「やっと逢えた…」

少女は少年の暖かい腕の中でうつとりと目を綴じた。
やっと少年に触れた。

声を聞いた。

ただそれだけで満たされていった。

「わ…悪い…ずっとあんたを探しててつい…」

我に返った少年は慌てて少女を離すと、うつすらと頬を染め後頭部を掻いた。

そんな少年を見て少女は嬉しそうに微笑む。

「私もあなたを探してた。逢いたかった…」

少年は少女の言葉に目を見開き驚いた様だったが、つられ笑顔になると頭を下げた。

「あの嵐の日、助けに来てくれてありがとう…。俺はうちはサスケ。あんたは？」

少女は戸惑った。

人魚に名前など無いから。

「私…名前無いの…」

うつ向く少女に本日何度目だろうか、驚くサスケ。
寂しそうな少女をじっと見つめた。
あの日と同じ桜色。

明るい日の下でも綺麗に映える。

「サクラ…」

「え？」

「あんたの名前…名がないのは不便だからな…気に食わないか？」

やっとあなたの前に姿を現す事ができた。

言葉を交す事ができた。

目の前にいるサスケ君の笑顔は私に向けられている。

サクラ…。

素敵な名前。

これは夢なのだろうか。

夢ならどうか覚めないで…。

c o n t i n u e

s t a g e 4

ああ、あなたに触れられた幸せ。

でもこの手にある短刀は私の幸せに割って入る。

ただあなたの側で、あなたに埋めつくされているだけならどんなにいいでしょう。

「よお……」

「サスケ君」

今日も海を訪れるサスケ。

二人は毎日時間の許す限り、この砂浜で語り合っていた。

海はそんな二人を優しく見守っているようで穏やかだ。

太陽の光にキラキラと輝き、二人の為に囁く。

「なあ、サクラはどこに住んでるんだ？今まで見掛けた事なかったよな…」

「秘密よ。最近ここに来たばかりなの」

「なんで名前がなかったんだ？」

「そんな事どうでもいいじゃない。今はサクラという名前があるものの」

サクラは一切、自分の身上を話す事はなかった。

聞いても寂しそうな表情を浮かべ、悲しそうに微笑むだけではぐらかされてしまう。

少しでもいいからサクラの事を知りたい。

サスケはそう思っていたが、サクラの表情を見るとそれ以上の追求はしなかった。

「そうだな…俺はサクラと一緒にいれるだけで十分だ…」

「サスケ君…」

サクラの手に重なるサスケの手。

暖かい温もりに、サクラはうつとりと目を綴じる。

「サクラは俺が触れると必ず目を綴じるんだな」

「今までこんな暖かい気持ちになった事ないから。しっかりと覚えておきたいの…」

目を綴じたサクラに、サスケは顔を近付けた。
二人の唇が重なる。

その日の夜、サクラはサスケと一緒にいた時と同じ様に砂浜に座り目を綴じる。

すると蘇る昼間の楽しかった時間。

サクラは次にサスケと逢う時まで、繰り返し繰り返し話した事、触れた手を思い出していた。

「可哀想な人魚…今は幸せそうね？」

邪魔が入った事により、目を開いたサクラの前にいたのは大蛇丸。

「大蛇丸さん…」

「約束していた件はどうなったのかしら？」

「大丈夫よ…必ずやり遂げるわ。人間にしてもらったんですもの」

「サスケ君…里を案内して欲しいんだけど」

サクラの突然の申し出により街中を歩いている二人。
サスケを知る者はそんな二人の姿に足を止め驚き振り返った。

「ここは甘栗甘だ…甘味が食べられる。甘いものは好きか？」

どんな所に連れて行っても浮かない表情のサクラに、サスケはだんだんと不安になってくる。

「俺の案内はつまらないか？」

「違うの…私、火影様がいるって家を見てみたいわ」

なぜそんな所を見たがるのかと首を捻ったサスケだが、サクラの言う通りに火影邸へと連れて行った。

「ここが…」

「ああ…今は三代目がいる。…サクラ？」

火影邸を睨みつけるサクラ。

それに気付いたサスケは眉根を寄せてサクラの顔を覗き見る。

「な、なんでもないのよ…私、今日は帰るわね。また…明日」

「おい、サクラ！」

呼び止める声も聞かず歩いて行ってしまったサクラ。

様子がおかしい。

そう思ったサスケはサクラの後を追った。

海岸に戻ったサクラは暗くなるのを待ち、再び里へと向かった。

その後ろには気配を消したサスケ。

忍でもないサクラが気付くはずもなく、やがて火影邸へ辿り着く。

「……ここで何をするつもりなんだ？」

塀をよじ登り中へ消えるサクラ。

サスケは木の上に潜み、しばらく様子を見る事にした。

一方、火影邸への侵入に成功したサクラは、事前に大蛇丸に聞かされていた通りの道順を進み、火影が寝ているであろう部屋の前に立っていた。

手に短刀を握り締めて。

すると目の前の扉がスツと開かれ年配の男性が現れる。

昼間サスケに案内された火影岩で顔は知っている。

やるしかない。

サクラは短刀を握り直した。

「お主誰じゃ？見ず知らずの者に命を狙われるのはよくあるが、お主のような可愛い女性は初めてじゃのう」

思いもよらない笑顔に決心がにぶる。

だがサスケと一緒にいるために。

サクラは短刀ごと三代目にぶつかっていった。

だが短刀は容易くかわされ、サクラは部屋の床に倒れこむ。

通路には殺気を感じ取った暗部が数名待機していたが、三代目はそれらに目で合図をすると部屋の扉を閉じた。

「訳を聞かせてはくれんか？外にはサスケも来ておるぞ」

「サスケ君が！？」

ここへ入ったのを知られてしまつては、もうどうにもならない。
全て知られ、嫌われてしまふかもしれない。

サクラはその場へ崩れ、涙を流した。

私はあなたと一緒にいたいだけ。

その代償はなんて大きいのでしょうか。

あなたと一緒にいられるのなら、なんでもするつもりだった。

けどこんな罪をおかした私は、今まで通りあなたに触れてもらえるのかな。

c o n t i n u e

s t a g e 5

私の手にある短刀。

これは私とあなたが一緒にいるための物であって、二人の仲を裂く物。

ねえ、私はどうしたらいいのかな？

あなたの事を想うと涙が止まりません。

「人魚じゃと…？」

人間になる事と引き替えに請け負った三代目の殺害。

それを諦めたサクラは三代目に全てを話した。

赤く目を腫らしたサクラの側には、役目を達成する事のなかった短刀が転がっている。

サクラの話を聞いた三代目は信じられない話に耳を疑い、気持を落

ち着かせようとパイプを口にくわえる。

「人魚を人間にしてしまうとは…大蛇丸のやつめ」

「私…サスケ君と…」

「わかっておる。じゃがわしもそう簡単に殺される訳にはいかんのじゃ」

うつ向くサクラに苦笑いを浮かべる三代目。

サクラは再び短刀を手にする。

険しい表情に変わった三代目の前で、サクラは己の喉元目がけて短刀を振り下ろした。

「…なんで…」

サクラの目からまた涙が溢れ落ちる。

短刀はサクラの喉に僅かに食い込んだところで、三代目によって阻まれた。

「そう易々と命を粗末にするでない。本当のお主をサスケが受け入れないと思うのか？お主が好いているサスケはその程度の男なのか？」

三代目の言葉がサクラの胸に突き刺さる。

サクラは三代目の手を振り払うと部屋から飛び出した。

私は人魚。

人間ではない。

きつと受け入れてもらえない。

「サクラ！一体何があった！？」

火影邸を出たところでサスケが木の上から降り、サクラに走り寄っ

てくる。

サクラの手に握られた短刀と、赤く腫らした目を見て何かが起こった事は明らかだ。

「…何をしていた…」

「サスケ君…」

「答えるサクラ！お前は一体…？」

肩を掴まれガクガクと揺さぶられるサクラ。

無理矢理笑顔を作るとはつきりとした口調でサスケに告げる。

「私…人間じゃないの」

「は？何を言って…」

「人魚なの」

サスケの顔が信じられないという様に歪み、サクラの肩を掴む手が緩み離れていく。

それを見たサクラは眉根を寄せ、目の端に涙を溜め走り出した。

「サクラ！」

残されたサスケが思い描くのはあの嵐の日。

自分を助けた桜色。

優しい微笑み。

サスケは小さく舌打ちすると走り出した。

海へと向かって。

暗くうねる海。

失った人魚を求めるように、砂浜に打ち寄せては引いていく。

「失敗したようね…可哀想な人魚」

スッと岩影から現れた大蛇丸。

ゆつくりとサクラに近付いていく。

「三代目を殺す事が人間にしてあげる条件。私は条件を破られてもそのままにしておいてあげるなんて優しさは持ち合わせてないの。わかるわね？」

目を綴じると浮かんでくるサスケの顔。

人魚だと告げた時の表情。

受け入れてもらえないのなら、人間でいる必要はない。

サクラは目を綴じたまま頷いた。

「ふふ…いさぎ良いのね。好きよ、そういうの」

せめて最後はサスケの温もりに抱かれて…。

サクラはサスケの笑顔、触れた手の暖かさを想いながら意識を手放した。

少し遅れて海岸へたどり着いたサスケの目に飛込んできたのは、砂浜に横たわるサクラの姿。

サスケはサクラに駆け寄ると抱き起こし、膝に乗せる。

「サクラッ！サクラ！…サクラ！」

何度呼んでも返事はない。

顔に手をかざすが息を感じない。

胸に耳を当ててみても何も聞こえない。

「何で…何でだサクラ…」

サスケの目に涙がにじむ。

頬を伝ったサスケの涙がサクラの顔に数滴落ちる。

サスケ力一杯サクラを抱き締める。

「何でこんな事に…まだ何も…俺、まだ何もサクラの事知らないのに…」

暗い海に腰辺りまでつかっているサスケ。

その腕にはもう目を開ける事のないサクラ。

サスケはサクラに触れるだけの口付けをすると、そつと手を離す。

サスケはそれを最後まで見ている事ができずに、溢れる涙を拭いた。

ちやぶん…

帰ってきた。

私を閉じ込める広い海。

やっぱり私はここにるのがお似合い。

ちやぶん…ちやぶん…

もう泳ぐ事はできないけれど、この体が果てるまで漂っていく。
あなたの事を想いながら。

ちやぶん…ちやぶん…

c o n t i n u e

s t a g e 6

砂浜にただ一人、膝を折って座るサスケ。

あれから半月程過ぎただろうか…サクラがいなくなってしまうてからも、この海へ来る事を止めなかった。

「サクラ…今日は一段と暖かいと思わないか」

そして時折、波を見つめながらサクラに話しかける様に一人呟く。
何も知らずに出会い、何も知らずに別れを経験したサスケ。

サクラの事を忘れられずにいたが、あれは夢だったのではないかとも思う。

「じゃあそろそろ帰る。…また明日な」

ちやぷん…

立ち上がり海に背を向けたサスケの耳に飛込んだ水音。
振り返ったサスケの目が波をさ迷う。

ちやぷん…

もう一度聞こえた。
今度は桜色と共に。

「サクラ…？」

舞うように進んで行くその姿はとても綺麗で、サクラと同じ桜色。
サスケの眩きが聞こえたのかどうかはわからないが、その桜色が水面に顔を出した。

「サクラ！」

海へ向かって走り出したサスケのその足はすぐに止まってしまふ。
桜色が笑顔で手を振っていたから。
サスケは唇を噛み、拳を握り締めるとゆっくりと手を上げ振り返した。

涙を堪えながら懸命に笑顔を作る。
そんなサスケに桜色は一際輝く笑顔を残し、水中へと消えて行つた。

ちやぷん…

黒髪の少年…。

なぜかあの少年が気になった。

止める頭とは裏腹に、心が体を動かし少年に姿を見せた。

「サクラ」

という言葉に誘われて。

初めて逢った少年に手を振った時、暖かい気持ちになったのは気のせい？

ちやぷん…

私は人魚。

この広い海に抱かれながらただ漂うだけ。

ちやぷん…

もう逢う事はないけれど

「ありがとう」

なぜか心からそう思う。

ちやぷん… ちやぷん…

海を舞う桜色。

その姿は美しく、その心もまた美しい。

ちやぷん…

少年を想った桜色の心は今日もどこかで…。

ちやぷん…

f.i.n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643a/>

「泡」/サスサク

2010年10月10日20時27分発行